本だな

「南極の空：気象観測隊員が見つめてきた極みの大地」

気象庁「南極の空」編集委員会　編，
クライム社，2004年3月，
173頁，4,700円（本体価格）
ISBN4-907664-49-4

今年の春に話題を呼んだ映画のように，極域の寒気が急激に強まり中緯度地方に押し出して，一月もしないうちに氷河期を迎えるということはありえない話であるが，極域の大気の振る舞いの理解が気候変動予測の鍵であることは確かである．非常に暑かった夏が過ぎた今，南極の写真をみて，「気候変動と地球観測」について考えてみる秋を過ごすのも良いのではないだろうか．この本は，南極についての予備知識の無い人でも眺めることができ，肩がこらない読み物としても楽しむことができる．

「南極の空」というタイトルから南極の「空や雲」の美しい写真集を期待する人には，「意外」と思える内容であるが，タイトルを「南極の空の下で」と置き換えて読むと(みると)，この本は南極事業を担う南極観測隊員の気持ちが伝わる1冊である．南極観測隊員は南極に行ってみたいと思う若者のあこがれである．その一方で，地球観測の重要性が唱えられる今日，南極観測のあり方について種々の議論がある．南極で暮らした隊員の目を通した記録をみて，隊員の「感覚」を吸収することは意義深い．

第1章は，南極の「極み」について，写真で読者をひきつける．特に，低温の「極み」，生物生存の「極み」を示す写真は美しい．

第2章と第3章では，砕氷船「しらせ」，「ふじ」，「宗谷」による南極までの長い道のりをふりかえる．氷山とペンギンに出迎えられる隊員の感動が伝わる写真が続く．

第4章「沿岸の空」は，南極の動物と南極で暮らす隊員の写真集である．南極の自然に溶け込んでいる動物と文明を持ち込まないと生きていけない人間の，それぞれの暮らしが好対照をなすのが興味深い．人間の生命力の強さを示す写真は，人間が南極に昔から暮らしてきた動物たちとは異質な存在であることを悟らせる．編集者の意図はどこにあったのだろうか．

第5章「南極の夜空」だけは，美しいオーロラの写真が続き「南極の空」らしい．さまざまなオーロラの姿を見ることができる幸せは，長く厳しい滞在に耐える隊員に与えられる天からの贈り物なのだろう．

第6章「大陸の空」は，内陸の「ドームふじ観測拠点」と「あすか観測拠点」に向かう隊員のみた空である．写真のフレームの中で空よりも地表面の占める割合が大きいことから，移動中の隊員の目線の高さが推定できる．

第7章「南極の風と光」では，風と雲とオゾン観測にみる南極の大気現象の写真が美しい．四角い太陽と緑の太陽の写真は必見である．

終章には，氷山群を後にして，帰国の途で虹をみるまでの写真がある．帰国の途でみる「虹」に暖かさを感じるという隊員の気持ちは，この本を最初から最後まで通して読んだ人にはよくわかるであろう．

各章の終わりにある Information では，南極大陸の科学的解説，南極観測の歴史，昭和基地の位置，南極の気象と気候の解説がカラーの図を使って簡潔にまとめられている．また，最後の資料編では，わかりやすい図と写真を使って，「南極氷床」，「南極の気象観測法」，「オゾンホールの意味」，「南極でみられる光学現象」，「南極観測の歴史」について解説がなされている．1人で読むのは中学生でも少し難しいかもしれないが，先生の説明があれば小学校高学年の生徒にもわかるような図や写真が多い．気象学会員諸兄から，中学校・高等学校の図書室や市民図書館に推薦してほしい1冊である．

この本に使われている写真は南極気象観測隊員が撮影したものであり，南極観測の経験を持つ気象庁の有志が集まって編集したのだという．一部に粒子の粗い写真やピントの甘い写真が含まれているが，プロ並みの美しい写真が多い．全頁上質紙を使ったカラー版であるので，1冊4,700円はけして高価ではない．

（名古屋大学地球水循環研究センター　上田　博）

© 2004　日本気象学会